



ンボモ村便り



コンゴ共和国オザラ・コクア国立公園のンボモ村より

第6回

萩原幹子（JWCS プロジェクトスタッフ）
2024年7月



ふたつの助成金のプロジェクトが3月で終了し、4月からはクラウドファンディングによる資金で、養蜂教室を継続しています。

初年度の経験から、アフリカミツバチは野生群を取り込むのが容易でないため、なるべく多くの巣箱を「待ち箱」として設置する必要があります。そこで教室の講師の監修のもと、森から伐採されてくる木材が比較的安く手に入るウェツソというコンゴ北部の町で巣箱にする木材を購入し、製材所で正確に統一された大きさの木材を巣箱40個分切ってもらい、ンボモに運搬して、組み立てました。

ンボモ村ではこの追加の40箱とハチが入っていない既存の巣箱の扱いについて、教室のメンバーで話し合いました。これからは各自が実践の段階に入るため、「待ち箱」の設置とチェックを一人2～3箱ずつ、責任を持って行うことにしました。

また蜂蜜が採集できたときのために、蜂蜜を扱う小屋を建てる計画でしたので、講師の自宅の敷地で人目につく道路沿いに建てることにし、早速屋根の工事から始めました。先に屋根を作ってから、その下にブロックを積み上げて行くのだそうです。

私がンボモ村へ行った5月時点で、巣箱へ待ち受けのために置いた場所から蜂場に移動した3セットの巣箱のひとつに蜂蜜が作られているのを確認しましたが、まだ少ないのもっと蜂蜜が増えるまで待つことにしました。また7月に入ると、追加で設置した待ち箱のうち3箱にハチが入っていることが確認されました。これから「分蜂」といって、新しい女王バチと働きバチの一部が元の巣から分かれ、新しい住処を探す季節になります。どれだけハチを巣箱に取り込めるか、みな期待しています。

マルミミゾウは、村を囲った電気柵の中には入らなくなりましたが、柵の外でたまに人間が負傷を追う事故が発生しています。どうしたらこういう事故が防げるのか、学んでいかなくてはいけないところです。



製材所の責任者に説明する養蜂講師



パッションフルーツの木の下に集まって話し合う受講生たち



蜂蜜ができてきていることを講師が説明



蜂蜜加工場建設工事の始まり